

第5回公開シンポジウム

地球温暖化と大気汚染による影響の軽減に向けた新たな取り組み

—短寿命気候汚染物質 (SLCP) の影響評価とその削減対策—

「短寿命気候汚染物質 (SLCP)」には、PM2.5の一部である煤 (黒色炭素)、光化学オキシダントの主成分である対流圏オゾン、その対流圏オゾンの生成に寄与するメタンなど、気候に与える影響が大きなものが含まれています。そのため、SLCPを削減することは、環境改善だけではなく、地球温暖化を抑制する効果もあり、国際的な取り組みも行われています。

今回で最後の開催となる第5回シンポジウムでは、SLCP排出シナリオの検討結果を始め、過去から将来にかけてのSLCP変化による地域・地球規模での環境・気候影響評価について、5年間の研究成果を発表し、今後の展望を議論します。

プログラム

「S-12研究から得られたSLCP削減による気候・環境影響と将来課題」

・中島映至 (S-12代表、宇宙航空研究開発機構)

「アジア域におけるSLCP関連物質による大気環境影響 - 過去、現在、未来 -」

・大原利真 (国立環境研究所)

「気候変動と大気汚染を考慮した将来の排出シナリオ」

・増井利彦 (国立環境研究所)

「大気汚染物質による気候・健康・農作物への影響の評価」

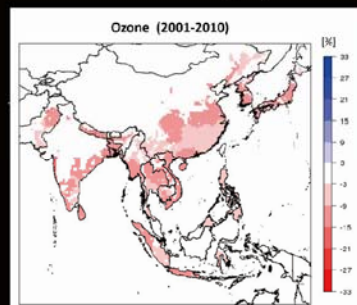
・竹村俊彦 (九州大学)

「SLCPによる地球水循環への影響」

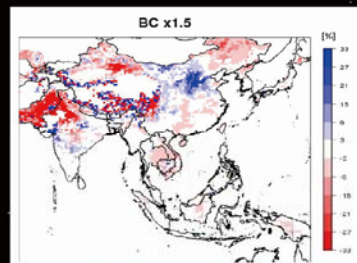
・芳村圭 (東京大学)

総合討論

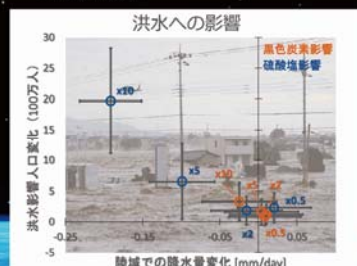
(司会：鶴田治雄 (リモート・センシング技術センター))



上図：2001年から2010年まで平均したオゾンによる水収量の変化率。広範囲に水収量が減少している。



上図：BC (黒色炭素)の排出量を現状より1.5倍にした時の水収量の変化率。BCの排出量を増加させたことにより、水収量が減少する地域と増加する地域がある。



上図：黒色炭素または硫酸塩エアロゾル放出量を現状より半減から10倍にまで増減した場合、どれくらいの人口が「洪水」にさらされるかを示している。黒色炭素10倍で約3倍 (約60万人増)、硫酸塩エアロゾル10倍で約2倍 (約200万人増)。

平成31年1月11日 (金)

東京大学 情報学環・福武ホール
福武ラーニングシアター (本郷キャンパス)

13:00 ~ 16:10

<https://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/>

参加申し込み：お名前 (ふりがな)、ご所属を明記の上、メールにてお申し込みください。

申し込み期限：平成30年12月25日 (火)

申し込み・問い合わせ先：s12_staff@aori.u-tokyo.ac.jp

参加費
無料